



私の思い出写真館

脱サラ・脱都会が 起業の原点



伊藤 守
毎日コムネット
取締役社長



休日にホテルスタッフと鱒釣りに出掛けた時の様子。
右から2番目が筆者(昭和52年)

昭和51年秋、大学を卒業して入社した山崎製パンを1年7カ月で退職し、まったく知り合いのいない新潟県・妙高高原のリゾートホテルに支配人として赴任することになりました。

当時の憧れの職業はペンションのオーナーでした。テレビでも、故・田宮二郎氏主演で、都会で疲れた男女が高原のホテルを再建する「高原へいらっしゃい」という連続ドラマが人気を博していました。サラリーマン生活になぜか没頭できない私は、躁鬱^{そううつ}気味な日常を送っていましたが、ひょんなことからパートで勤務して



ホテルの玄関先でお客さまと。(昭和52年)

た女性のよろず相談を聞き、それが発端となって、何の勝算もないのに、脱サラ・脱都会という、「英断」というより「暴挙」に打って出ることになりました。

私が支配人となってから2年2カ月後、ある出

来事が起こります。雪の降りしきる昭和54年1月18日、お子さんがいないホテルのオーナーは愛犬を残し、奥さんと共に「夜逃げ」をしてしまったのです。妙高高原に骨を埋める気で勤務していた私には帰る場所もなく、またシーズン途中という事情もあって、お客さまへの対応やら、債権者との折衝もあり、ホテルに残り、残務処理をする腹を決めました。その時の心境を思い出すと、不思議なことに、毎日足取り重く出勤していたサラリーマン時代とは異なり、生き生きと活動している自分を見いだしていました。

ホテルに1年残って汗を流し、残務処理もめどが立った時に、今後の人生行路を考えました。サラリーマン生活に戻ることは既に選択肢になく、この経験を通じて迷うことなく「起業」を決断したのです。そして、資本力が必要なホテル業ではなく、城はなくても機動的な活動で躍進できる野武士のような旅行業で起業しました。

この写真を見るたびに、サラリーマン落第生で都落ちして、揚げ句の果ては主人にも見捨てられたのが、「人間万事塞翁が馬^{さいおう}」ではありませんが、ピンチはチャンスのターニングポイントだったとつくづく思います。